

(別紙2)

## 審査の結果の要旨

氏名 夏木 大吾

本論文は、後期旧石器時代末期の遺跡の空間構造を、地考古学、石器群構造、居住行動という最新の研究視点に基づいて徹底的に解析し、晩氷期に展開した人類集団の生活行動とその軌跡を具体的に明らかにした完成度の高い実証性に富む意欲的な研究である。これまでの研究では、旧石器時代末期(晩氷期)の北海道に生活していた先史狩猟採集民は、小領域を計画的に開発していたため、回帰的で兵站的な行動戦略を保有していたと理論的に予測されていたが、それはモデル設定のレベルにとどまっていた。それを北見市吉井沢遺跡というひとつの遺跡内の徹底的な資料分析によって初めてその実態を明らかにした本論文の研究方法は、きわめて説得力のある成果に結実している。

本論文は6章からなり、第I・II章では研究の目的と問題の所在について、研究史の整理と問題点の抽出、最新理論である地考古学適用の意義と方法等について議論する。第III章では、地考古学の方法の一つであるファブリック解析により埋没後擾乱の影響が僅少なことを確認して、空間構造分析の意義を担保した。

本論文の中心となる第IV章では、細別石材ごとの石器リダクションと接合関係、微細遺物、使用痕分析等の相互関係から、石器の管理形態・再利用・キャッシュ、場の利用強度等の文化的意義を見いだすことに成功している。さらに第V章において、被熱石器の空間分布を詳細に検討することにより「見えない炉」の存在を特定し、人の生活行動の多くが炉を中心として展開したことを明らかにした点は特筆されよう。吉井沢遺跡には視覚的に確認できる4つの遺物集中があるが、炉は視認できなかつた。その集中の中に都合最低5つの炉が存在し、その周囲で獲得動物の解体・処理から皮革加工という特定作業空間と、より一般的な居住活動空間の2種の機能空間が同定されるという評価は、きわめて重要な研究成果である。有機質遺物が遺存しない日本の旧石器時代遺跡におけるこの評価は、豊富な有機質遺物を有する世界の先史時代遺跡研究と比肩可能な水準を確保しており、分析手法の正確かつ緻密な実施によれば有機質資料の不在という条件が克服可能なことを示したことは、今後の旧石器時代研究の展望を大きく切り開いたと言える。なお第VI章は、既述をまとめた結論となっている。

惜しむらくは、吉井沢遺跡の空間構造の普遍性に関する言及に乏しい点が挙げられるのだが、それは今後の日本列島の旧石器研究全体に当てはまる課題でもあり、本論文の意義を損なうほどのものではない。

以上より、本委員会は博士(文学)の学位を授与するにふさわしいと認めるものである。